

## 上級プログラム

2020.9.13 東京定例会

藤坂龍司

はじめに

<上級課題とは>

つみき BOOK、つみきプログラムで「上級・年長課題」として取り上げているものには大きく二種類ある。

A. セラピーの結果知的に正常か軽度になったおよそ4才以降の子どもたち向けの課題（上級課題）

B. 知的にはまだ遅れがあるが年齢が4、5才に達したことで可能かつ必要になる課題（年長課題）

Bには運動系（縄跳び、鉄棒など）や身辺自立系（身体を洗う、歯を磨くなど）が含まれる。

ここではA「上級課題」を扱う。年齢は4～6才を想定。

<上級課題のポイント>

①社会性

②ことば（特に会話スキル）と知識・理解

③アカデミックスキル（文字の読み書きと数、絵と工作、楽器）

ここではこのうち①と②を取り上げる。

### 1. 上級社会性課題

セラピーの結果、知的能力やことばは伸びても、社会性や集団適応は依然として悪い子どもが多い。上級では、それらの子どもの社会性の改善が大きな課題となる。

①集団適応の問題

全体指示に従えない、活動中に立ち歩く、大声を出す、お友達に他害する、など。

②お友達との関わり

うまく遊べない。遊びの仲間に加われない。関わり方が一方的。自分の興味のあることだけしゃべる、負けが認められない、など。

<改善方法>

主に以下の方法がある。

①シャドー

②ピアトレ（プレイデート）

③幼稚園ごっこ（学校ごっこ、サークルタイム）

④その他（SSTなど）

（1）シャドー

幼稚園などの集団に、親やセラピストが「シャドー」として付き添い、その場で直接支援をする。これがおそらく最も有効性が高い。ロバース博士らの早期集中介入では、この支援を必ず行った。

シャドーは、ABAの原理や技法に精通し、かつその子どもの現状をよく把握している必要がある。したがって幼稚園側がつけた介助員ではなく、親かセラピストが「シャドー」としてつくことが望ましい。

＜シャドーにつけない場合：連絡帳を使った遠隔操作＞

とはいえ、園の方針などで、親がシャドーにつけないことも多い。そういう場合に、連絡帳を使った「遠隔操作」がうまく行く例もある。

Bくん5才。年長組。園の方針で、お母さんはシャドーにつけていない。Bくんは絵本の時間にじっとすわってられない、などの問題がある。付き添いの先生はいるが、制止できていない。

○手続き

簡単な目標（「絵本タイムのとき、ちゃっとすわってきく」など）を1～2つ立て、紙に書いて、朝、本人に読ませる。連絡帳にも書いておく。

その日、それがちゃんとできたら、先生にニコちゃんマークを書いてもらう（ちゃんとできなかったら、残念マークを書いてもらう）。本人にも、連絡帳を見せずに自己申告させる。

先生がニコちゃんマークを書いてくれていたら、家に帰ってからほめて、おやつ（ゼリーなど）＋シール1枚。ただし本人の自己申告で、できていなさそうなときは、シール半分にすることも。シールが10枚たまるとコンビニで好きな物を一つ買ってもらえる。

○結果

自信があるときは自分から連絡帳を出して、報告してくれる。自信がないときは「どうかな。ないかも」などという。8月末の幼稚園再開から、4日間連続でニコちゃんマークをもらい、いまのところすべり出し好調。

## （2）ピアトレ（プレイデート）

もう一つの方法として、同年代のお友達を自宅に招き、親やセラピストが仲立ちとなって、わが子に遊び方、関わり方の練習をさせる、という方法がある。米国では「プレイデート」「ピアプレイ」などと呼ばれる。

ロバースの直弟子たちによる優れた研究（Sallows & Graupner, 2006, Cohen, et al. 2006）ではこのプレイデートを、シャドーと並んでとても重視した。サローズらの研究では、知的に正常域に達し、小学校普通学級に入った子どもたちは、平均して週6時間のプレイデートを実施した。最初のうちは一人のお友達（ピア）を自宅に招く。半年経ったら、別のお友達を招く（いろんなタイプのお友達に慣れさせるため）。ピアは親が知り合いの親や幼稚園の先生に相談するなどして集めた。最終的には数人のピアを自宅に招いて、「学校ごっこ」をした、とのこと。

## （3）幼稚園ごっこ（学校ごっこ、サークルタイム）

家庭で、お友達や家族の協力を得て小集団を作り、幼稚園や学校の活動（例えば朝の会）の練習をする。ピアを招かなくても、パパやおじいちゃん、お姉ちゃんなど、家族にピア役になってもらえばよいので、実施しやすい。サローズらはこの「学校ごっこ」（モック・スクール）で「学校サバイバルスキル」（名前を呼ばれたら返事をするなど）を教えたとのこと。

## （4）その他（SST）

サローズらは、これらの方法に加えて、家庭セラピーでも、ロールプレイやビデオモデリングなどを使って、子どもに対人スキル、コミュニケーションスキルを教えたとのこと。これは日本で SST(ソーシャルスキルトレーニング)と呼ばれるものにあたる。

例えば、子どもが、お友達の遊びの輪の中に入るのが苦手だったら、家でロールプレイを行う。大人二人が子ども役になって遊んでいるところに、三人目が「ねえ、入れて」などと話しかける(モデリング)。遊んでいる二人が「いいよ」と言って、三人で一緒に遊び始める。モデルを見せたあとは、子ども本人に練習させる(リハーサル)。うまくできたら、ほめて強化する(フィードバック)。

この「モデリング→リハーサル→フィードバック(強化)」が SST の基本的な手順である。

ロールプレイは、人形を使って行うこともできる。例えばカレーパンマンとドキンちゃんが遊んでいるところに、アンパンマンが「入れて」と言いに来る。これを大人がやって見せて、そのあと、子どもにアンパンマン役をさせればよい。

## 2. 会話とその他のことばスキル

ことば(コミュニケーションスキル)は、社会性と密接な関連がある。健常児は、4才、5才と急速にコミュニケーションスキルを発達させ、長い文章を話したり、長時間、会話をすることができるようになる。われわれの子どもにも、年齢相応のことば関係スキルを教えなければならない。

ことば関係の上級課題は多岐にわたり、すべてを紹介することはできない。ここでは、特に最近、私が継続的に担当している、今年年長になる B くんのために立案した、ことば関係の課題のいくつかを紹介しよう。

### <複雑な指示・幼稚園ことば>

幼稚園では、先生がかなり複雑な指示(三段階指示など)や婉曲表現、比喩表現などを用いるようになる。それを親御さんが見学で聞いてきて、家で練習した。

「お道具箱をお片付けして、手を洗ってから、スモックを脱ぎましょう。」

「太陽を描いた人は手をおひざして、目で合図してください。」

「水性ペンをお片付けして、お道具箱のふたにクレパスののりを入れて持ってきてください。」

「今からトイレに行って、帰ってきてから準備してね。どうぞ」(先生が「どうぞ」と言ってからトイレに行かなければいけない。「どうぞ」と言われるまでは立ってはいけない)

### <「ねー」ことば>

健常児は「あのねー、ぼくねー、きょう、幼稚園でねー、先生に怒られたんだ。それでねー...」のように語尾に「ねー」などの終助詞をつけることで間合いを取りながら、次第に長い文を話すようになる(「ねー」言葉は地域によって「なー」言葉や「さー」言葉に変わる)。

これを B くんに教えるため、情報交換型会話を利用した。B くんは地域では「あのさー」などの関東弁が流行っているので、「さー」言葉を教えることにした。

大人が「あのさー、パパさー、きのうさー、いいことあったんだ。パパのお友達と、街で会ったんだよ」と言って、子どもに同じような言い方で自分のことを言わせた。

「あのさー、ぼくさー、きのうさー、いいことあったんだ。お友達の〇〇くんのおうちに遊びに行ったんだ」

### <会話の自発>

「ねー」言葉（「さー」言葉）の練習をひとしきりやったあと、これを会話の自発のために使えないか、と考えた。B さんに「あのさー」でお話しして」と言うと、いろんなことを話せることがわかった。

「あのさー、ぼくさー、ぞうさんがすきなんだ。それでさー、こないださー、パパと動物園に行ったんだよ。」

<紙芝居>

B さんは長い文をつなげて話せるようになったが、接続詞は「それから」とか「それで」ばかりで、なかなか「でも」「だから」「だって」などの他の接続詞を使えなかった。

そこで3～4枚の簡単な紙芝居を作り、それを「でも」などの接続詞を使いながら、大人がB君に読み聞かせ、そのあとで、B さんに同じことをさせてみた。

半年以上経って、ようやく最近、「でも」「だって」などの接続詞が日常会話の中でも出てくるようになった。



〇〇ちゃんは△△くんのおうちに遊びに行きました。



でも△△くんはるすでした。



〇〇ちゃんはがっかりして帰りました。